

ふるさと再発見 第39回

Rediscovery Omihachiman

近江八幡偉人伝 ⑫

昭和学園が輩出した夭折の画家

小野元衛

今回は前回紹介した昭和学園の生徒で夭折の画家・小野元衛を紹介します。

小野元衛は大正8(1919)年、昭和学園の創設に尽力した小野元澄、豊の子として大阪で生まれました。父・元澄は医師を営み、母・豊は、友人であった陶芸家・富本憲吉の妻の一枝の影響で、1920年代に始まる柳宗悦の民藝運動と深い関わりをもち、当時その理念を實踐していた上加茂民藝協団に参加、染織家・青田五良から染織の指導を受けていました。

元衛は大正12年、九州から両親とともに蒲生郡武佐村に移る

と、母の教育方針から、近江兄弟社が運営する清友園幼稚園に通い、その後昭和学園に入学、欧米の新しい教育法であるドルトン・プランの授業を受けました。また、幼い頃から絵を描くことが好きでした。

18歳の時、陶芸家の富本憲吉に相談して京都市立第二工業学校陶磁器科に進み、卒業後は陶磁器試験所に入所しますが、絵画への思いが断ち切れず、昭和15(1940)年東京御茶ノ水の文化学院美術部に入学しました。

生来、身体が弱く、つねに病と闘い続ける日々を送った元衛が「童顔如来」と名付けた仏像



童顔如来(雲)
(小野元衛の展覧会)

をはじめ描いたのは、中学を出たばかりの頃でした。そこには、穏やかな家族との日々と母の深い信仰心に裏打ちされた清らかな世界がありました。しかし、戦時に入ると文化学院は閉鎖され、同時期に家族を襲ったいくつかの不幸が元衛に「童顔如来」を描くことを拒ませて、

主題は近江や京都、東京の教会や仏塔などの建築物、あるいは人形になりました。

心身ともに疲弊しながらも絵

筆を取り続けた元衛でしたが、昭和22年、27歳という若さでこの世を去りました。生前、まとまったかたちで作品を発表する機会がなかった小野元衛の絵画ですが、彼の絵を好んだ俳人・伊藤観魚や、母が師事した柳宗悦からの薦めにより、昭和31年父・元澄の編集で画集「小野元衛の絵」が非売品ながら刊行されました。同書には、伊藤観魚、柳宗悦、陶芸家・河井寛次郎の序文が寄せられています。また、妹・志村ふくみ発行の「小野元衛の展覧会」でもその作品を見ることが出来ます。独特な筆づかいで、心ひきこまれる作品が多数掲載されています。



貝の図(一)
(小野元衛の展覧会)

新型コロナウイルス関連の情報は、市ホームページをご覧ください

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本紙掲載の催しが急に中止や延期になる場合があります。開催の可否は事前に担当課または主催者へご確認ください。また、最新情報は、市のホームページ <https://www.city.omihachiman.lg.jp/> で随時発信しておりますので、ご確認をお願いします。

人口と世帯

令和4年2月1日現在
()は前月比

総数	82,016人	(-76)
男	40,305人	(-38)
女	41,711人	(-38)
世帯	34,685世帯	(-49)

※外国人住民(40か国・地域/1,582人)を含みます。